

言葉の泉

白髪少年

ジリリリリ！

授業が終わり、机の上のノートと鉛筆を鞆にしまっているとき幼馴染のミサが話しかけてきた。

「ねえアリー、土曜日ブラオ湖で一緒に魚釣りしない？ 今日の夜おじさんが遊びに来るんだけど、明日魚釣りに連れて行ってくれるって！」

「当たり前じゃん、行くよ！」

ブラオ、とはドイツ語で「青い」という意味で、言葉通りブラオ湖には真っ青できれいな水が張っている。私達の遊び場といえばいつも湖の畔なのだが、実際に湖で遊ぶことはあまりなく、年に数回ミサのおじさんが釣りに連れて行ってくれるくらいだ。

明日は早いから、とそのままミサと別れて私は一人家へと向かった。

帰り道にある図書館に差し掛かったとき、図書館の前に立つ見慣れない一人の少年を見つけた。その少年は真っ白できれいな髪の毛を肩まで伸ばしていて、髪の毛先は不規則にクルッと巻かれている。着ている襟付きの白い長シャツはヨレヨレで、ところどころ土や泥がついて汚れている。茶色い長ズボンの裾は足首より上でしまっていて、ちんちくりんだ。変なの、と思いながらも私は変わらないスピードで家路を辿った。

家に帰った私はほんの数分前に見かけた少年のことを思い出していた。年は私と同じくらいか、少し若いくらいだろう。見慣れない少年だった、どこからきたのだろう、などと少年のことを考えていると、リビングから私を呼ぶ声が聞こえた。

「アリー、ご飯よー」

ママの声で、今まで考えていたことが風船が割れるようにパンツ、と消えた。

釣り

早朝七時のブラオ湖は、霧が立ち込めて視界が悪い。

「おーい、こっちこっち！」

ぼんやり見える人影を頼りに湖畔まで歩いていくと、嬉しそうに釣竿を構えるミサと、その横で小さな船に荷物を乗せているおじさんがいた。

「おはようアリー！ 今日たくさん釣ろうね」

「じゃあ勝負する？ たくさん釣れたほうが勝ちで、負けたら相手におやつ半分あげなきゃだめってことでどう？」

「いいわよ！ おもしろそう！」

少し話してから、荷物を積み終わったおじさんがかしこまった口調で私達を呼んだ。

「お嬢様方、船の準備が完了いたしましたぞ」

私とミサは黙って見つめ合い、クスッと笑ってから船に飛び乗った。乗り慣れた船だ。沖に出て五分ほどして、おじさんが船を止める、釣り竿にはすでに餌が付いている。さあ、勝負だ！

釣りを初めて数分、ミサの竿が引いた。ミサの方に気を取られていると、すぐに私の竿も引く。今日はおそらく大漁だろう！

釣りを始めて三時間がたった。案の定バケツはいっぱいだし、お腹も空いたしそろそろ帰ろうかというところで、私の竿が今までになく大きく引いた。油断していた私は大きく体勢を崩し、そのまま湖に落ちてしまった。パニックに陥った私は体に力が入り、ようやく竿を離したときには湖の底近くまで来てしまっていた。体制を立て直し、上に向かおうと思ったが、釣りで腕が疲れていて思うように動かない。その時上の方からバ

シャンと水の弾ける音が聞こえた。おじさんが私を助けるために飛び込んでくれたのだ。助かった、そう思って少し落ち着ちついた時、湖の底を傳って動く、光る何かが見えた。

光

よく見るとその「光」は一つだけではなく何個もある。すべてが同じ色で光っているのではなく、街灯のようにオレンジ色のものもあれば、ブラオ湖のように真っ青なものもある。一際目を引いたのが、枯れ始めたバラのように赤黒く、不気味な色を放つ光だった。そしてよく見ると、不規則な動きではあるが、この光はみな同じ場所を向かっているように見えた。その時、底までたどり着いたおじさんに腕を強引に引っ張られ、私は上まで向かっていった。

「アリー大丈夫！？ いつまでたっても上がってこないから本当に心配したんだから！」

水面に上がるやいなや、ミサが半泣きで船に座っているのが見えた。私は咳と一緒に水を吐き出してから冗談交じりに答えた。

「ごめんミサ、さっきの魚釣れてたらこの一週間は毎日魚料理だったのに」

「もう、冗談やめてよ」

涙を拭きながらミサが言った。私たちはまた黙って目を合わせて、今度はニッコリと笑ってからミサは私を引き上げてくれた。光の事を話そうかと思ったけどミサは私が無事だった喜びでそれどころではなかったし、見間違いだったら恥ずかしかったので言わないことにしておいた。

ポチャンッ

波紋

「車の中にタオルが入ってるからアリーは風邪を引かないうちに体を拭きな、あとおじさんにもタオルを。それと、車の中にサンドイッチも入ってるからミサはそれを取っておいで」

岸についてすぐ、おじさんが濡れた髪をかきあげながら言った。

「はい」

私とミサは返事をして、車までレースをしながら向かった。だが走り始めてすぐ、私はなにかが聞こえた気がして、スピードを落とした。

ポチャンツ

おじさんの方を振り返るが、とっくに岸に上がっている。なんだ？

ポチャンツ

どこからかは分からないが、何かが水に落ちたときのような音が聞こえる。いや聞こえるというより、頭の中に響く変な感覚だ。

「なにやってるのアリー！ このままじゃ釣りもレースも勝っちゃうわよ」

「まだ釣りは勝ったかどうか分からないでしょ、それよりミサ聞こえる？」

「え、なにが？」

どうやらミサには聞こえないらしい。

「...いや、ううん」

「変なの、どうかした？」

「ただちょっと疲れただけだと思う」

頭の中ではまだ波紋のような音が響いていたけど、その音も次第に収まり、私が車に着く頃にはまた静かになったので、言わないことにした。

タオルとサンドイッチを持って、私たちは畔まで戻っていった。おじさんはすでに

座っていて、私たちを見つけてからお腹をさすりながら言った。

「よし、お昼とするか」

言葉の泉

お昼を食べ終わって、私たちはキャッチボールをして遊ぶことにしたが、私もミサもボール遊びが苦手だ。予想通りミサが大暴投した。ボールは私の頭を大きく超え、後ろの林に入ってしまった。

「ミサ、今のは流石に取れないわよ」

「ごめんアリー、ちょっと手からすっぽ抜けちゃった」

「もう、ちょっと待っててね」

そう言って私は、林の中に入って行った。その瞬間だった。

ポチャンツ

あの音だ。頭の中に響いてくるあの変な感じ。そしてその音は、林に入っていくに連れて大きくなっている。どこから聞こえてくるのだろう。気がつくと、私はこの変な音に釣られて林の奥深くまで入ってしまったっていた。ボールを取りに引き返そうと振り返るが、横目に見覚えのある何かが見えて足を止めた。光だ。

薄暗い林の中をぼんやりと光りながら、複数の光が地面を這ったり、空中に浮かんだりしている。私は好奇心に体を任せ、その光を追って歩いて行った。光の向かう方向へ進むに連れて、光の数もどんどん増えている。今では薄暗い林もかなり明るい。もっと進んでいくと、木の隙間からようやく光が集まる場所が見えてきた。草木を抜けると、少し開けた円形の場所に出た。光は、その開けた場所の中心に集まっている。中央まで来ると、光は掃除機に吸い込まれるように、地面に吸われていった。だが近づくに連れて、それは掃除機ではなく半径1メートルにも満たない、小さな泉だということがわ

かった。どうやら林の中でずっと聞こえていたあの水音は、この光が泉に落ちる時の音だったらしい。

気になって泉の中を覗き込んでわたしは思わず

「わあ」

と声をあげた。泉の中は色とりどりの光が漂っていたのだ。綺麗な七色に輝く泉はとても神秘的だった。そしてよく見ると、その光は、水の中で漂いながら徐々に形を変え、私のよく知るものに形が変わった。「文字」だ。泉の中では数え切れないほどの文字があらゆる色で光りながら渦巻いている。大きさもさまざまだ。

座り込んでその不思議な光景に見とれていると、背後から誰かに怒鳴られた。

「そこで何をしている！」

後ろを振り返ると、昨日図書館の前に立っていたあの少年がいた。

「去れ、ここはお前のような者が来ていい場所ではない」

少年がきつい口調で言う

「なによ、あなただってこんな所で何してるのよ」

「関係ない、早く去れ。そして言葉の泉の事は誰にもいうな」

「ねえあなたまさかこの泉の事知ってるの？」

「お前には関係ない」

彼が私をにらみながら言う。

「わ、わかったわよ、帰ればいいんでしょ」

そう言うと少年は黙って頷いて道を開けた。私は立ち上がり、去り際にもう一度泉を覗きこんで、私は息を飲んだ。一つの赤黒い光が少しずつ形を変え、ある文字になったのだ。

「死ね」

好奇心

次の日もまた、私は「言葉の泉」に来た。怒られたものの、あの不思議な少年と泉のことが気になって仕方がなかったのだ。泉に着いたら、あの少年が泉のほとりの切り株に座って本を読んでいた。

「何読んでるの？」

「またお前か、この泉自体人に知られてはならないんだ。それなのにお前は」

「はいはい、分かったわよ。でもその泉のこと教えてくれないと帰らないわ」

「黙れ、今すぐ去るのだ」

少年が勢いよく本を閉じながら言う。

「けち！じゃああなたのことを教えてよ、名前は？私はアリー」

「名はない、そんなも私には必要ない」

少年は、同じ年齢くらいだとは思えない口調だった。落ち着いていて、どこか渋い。

「変なの、ねえやっぱり泉のこと教えてくれない？」

「ダメだ」

「ねえお願い！」

私は、泉のことが知りたくてもうたまらなかった。彼の言葉を無視して、何度も何度も彼にねだった。

「ええい、いい加減にしろ！そんなに知りたくば教えてやるから少し黙れ！」

少年は頭を抱えながら言った。ため息も付いている、少し悪いことしたかな、いやそんな事はどうでもいい、それよりも私は光のことや泉のことが気になってそれどころではない！少年がため息混じりに話し始めた。

「話せば長くなるが、この泉のことを大まかに説明すると、この泉は言葉を貯める事が出来る」

「言葉って、この光の事？」

ちょうど顔の横を通りかかった光を指差して聞いた。

「そうだ。そして、見てわかるようにこの光には赤や青、黄などまあ色々な色があるわけだが、それらは言葉に込められた感情を表している」

私は黙って前のめりになりながら彼の話に聞き入っていた。

「うむ、まあわかりやすいもので言うと、嬉しい時に出た言葉は明るいオレンジ色、悲しい時は青色、嘘をついた時は黄色、人を傷つけた言葉は赤色、と言った感じだ。感情の宿った言葉がこの泉に集まってくる」

「集まって、どうするの？」

「まだ知りたいか、まあいい、ここまで話したのだ。この泉は人間と同じだ。あまりに多くの言葉、主に、人を傷つけた負の言葉を貯めてしまうと、それらにやどる感情が溢れ出して暴走してしまう。そうならないように、私がいるのだ。私は何百年、何千年も前からこの泉が暴走せぬように見張ってきた。だが...いや、なんでもない」

また疑問が浮かんだ。何百年？ いったい彼は何年生きていると言うのだろう。

「ねえあなた、一体いくつだっていうの？ 私と同じくらいじゃないの？」

「馬鹿を言え、お前のような人間の小娘と一緒にするでない。私は、この世界で初めて言葉が生まれたのと同時に生まれたのだ」

頭の中を整理するのに、少し時間がかかった。言葉と共に生まれた？ 人間の小娘という事は、彼は人間ではないのだろうか？ 色々と馬鹿げている。だが彼の真剣な目を見る限り、嘘ではないようだ。

「まあなんかよくわかんないけど、そうなのね」

私は無理やり自分を納得させ、ふーんと頷きながら泉の方へと近づいて水を触ろうとした。

「触るな！」

彼が驚くような大きい声で私に怒鳴った。

「びっくりした、なによ？」

「言ったであろう、この泉は言葉に込められた感情も貯めている。むやみに触ろうとすれば、その感情がお前の中に流れ込み身も心も滅ぼすことになるぞ」

私はゾツとして急いで手を引っ込めた。

「それでいい。お前が犠牲になる事はない」

過ち

あれから数日間、私は彼のところへ通い続けた。彼は私が毎日会いに行くのを最初はこぼんでいたが、今では「またか」と軽く言う程度だ。そして彼と会い続けてちょうど十日がたったある日、彼の方から私に質問をしてきた。

「アリー、お前の好きな言葉はなんだ？」

「んー、言葉というか、友達っていう単語は好きよ。やっぱり友達って大切だもの。ていうか、急にどうしたの？」

「そうか、お前らしいな」

少し笑いながら彼が言った。「どうしたの？」という質問に対しては、なんでもないといい代わりに首を横に振った。

「あなたも、もう私の友達よ？」

すると彼は明らかに元気のない口調で答えた。

「勝手に決めるな、俺はお前の友だちになった覚えはない。それに、なれない」

「どういうこと？」

彼がため息をしてから答える。

「お前はもう泉のことを知っているから言うが、今、泉はいつ暴走してもおかしくないほど負の言葉をためてしまっている。いつ言葉が溢れるかわからない」

私は息を吞んで答えた。

「言葉が溢れたらどうなっちゃうの？」

「世界中に負の感情がまかれ、大勢の人間が犠牲になるだろう。だが、解決法が一つだけある」

彼は弱々しく答えて、頭を抱えた。

「言葉が溢れる前に、その負の言葉を一箇所に集めて圧縮し、まとめて消滅させなければならぬ。だがそれには器がいる」

まだあまり意味がわかっていない私は、黙ってじっと彼の目を見つめた。

「前にお前が泉を触ろうとして怒鳴ったことがあったが、ようはあれだ。誰かが、言葉を受け止める器になる。そしてその器が、私だ」

私は、この前彼に怒られたときのことを思い出した。なるほど、いやでもまて、何か嫌な予感がする。確かあの時少年は、泉の水を触っては、言葉に侵されるといつていた。

「そんなことしたら、あなたの身が滅んじゃうんじゃないの？負の感情を抱えるなんて」

「構わない、それでもいいのだ」

「だめよ！あなたが犠牲になることないわ！」

その時、周りが地震のように大きく震えた。

「予想より早かったな」

少年はそう言うと、ゆっくりと泉の方へと歩いていった。

「だめよ！ そんなことしないで！」

私は必死で彼の腕を掴みながら彼を止めようとする。

「離せ！私がやらなくてはならないのだ」

「なんでよ、他に解決策があるかもしれないじゃない。それに、なぜあなたじゃなきゃだめなのよ」

地鳴りのような音も聞こえる。少年の奥では、言葉の泉が赤黒く光りながら大きく渦を巻いているのが見えた。

「私は今までたくさんの言葉を使って人を傷つけてきた。だから私が、言葉とともに生まれた私が、負の言葉を消滅させる必要がある！」

地鳴りが鳴り響く中、彼が大きな声で答えた。

「そんなの、誰だってそうよ！ あなただけじゃないもの！」

少年が私の手を振りほどいてこっちを見た。

「いいか、今まで言葉というものはありとあらゆる過ちを産んできた。戦争、差別、イジメ、虐待、他にもまだまだある。今まで、どれほどの言葉が人を傷つけ、殺してきたと思う！？私はもううんざりなんだ！言葉で誰かが傷つくのは！見ろ、泉の渦を。今まで何千年もかけて溜め込んできた負の言葉だ。これらが一体何人の人を殺した！？」

少年が赤黒く渦巻く光を指差しながら言った。

「でも、人を傷つける言葉ばかりじゃないでしょ！愛情とか友情とか、たくさんある！」

「なら、お前の目でよく見てみろ！」

そう言われて、私は少年に首根っこを捕まれ、泉の方へと向けさせられた。赤黒く渦巻く光の中に、時々黄色い光も見える。そして私はそれを見て、息を呑んだ。

「大好き」「ずっと友達だから」「楽しい」「笑い」

渦の中で、見つけた黄色い言葉だ。

「黄色は嘘の感情だ。見てわかっただろう、人間は醜い生き物なんだ。愛情であるはずの言葉も嘘、友情も、喜びも、全て嘘だ。すべて人を傷つけ、欺いてきた。私は誰よりも言葉とともにいたからわかる。お前ら人間は、最低だ」

私は膝から崩れ落ちた。改めて見ると、泉には嬉しい時のオレンジ色の光は数えるほどしかない。ほとんどが、赤黒く、醜くて、汚い。

「だが私がこの負の言葉を消滅させれば、この世界でも人を傷つける言葉が一時的ではあると思うが消えるだろう。」

「でも...それじゃあなたが..」

「お前には関係ない、泉のこと知られたから少しは仲良くしてやったが、お前にどうこう言われる筋合いはない！」

「でも、あなたに消えてほしくない！」

私はそう言って、彼に抱きついた。自分でも、何をしているのか分からなかったが、止めるのに必死だ。

「離せ！もう時間がないんだ！こうしているうちにも、また世界の誰かが言葉で傷ついている、もう終わらせてくれ！」

「でも、あなた一人で抱え込まないでよ！」

私は泣きながら叫んだ。

「私は何千年も前から、言葉を見守ってきた。だが見てみる、時代が進むに連れて、言葉は人を傷つけるだけだ。それは言葉とともに生まれた私の責任だ、私がしないでそれがする！」

私を振りほどきながら、彼はまた泉へと向かう。

「それなら私も背負うわよ！」

考える前に、口走った。

「ついこの前知り合ったお前がなぜ身を投げる？」

「人を傷つける言葉を生んできたのは、私達人間よ。だったらその人間が責任をとる必要があるわ！」

「人間の一人や二人が犠牲になったところで、暴走は止まらない！」

「だとしても、あなただけで抱え込まないでよ！」

「うるさい！私の勝手だ！」

「だめよ！帰ってきて！あなたは一人じゃないわ！」

「黙れ！私は....ずっと孤独だ...」

その時だった。

ポチャンツ

泉に、一つの黄色い光が吸い込まれた。

「孤独」

その一瞬、周りがシーンと静かになったような気がした。私はもう一度彼を強く抱きしめてから言った。

「ほらね、あなたは独りなんかじゃない」

次の瞬間、私と彼の足元から明るいオレンジ色の大きな光が泉に向かって高速で飛んでいき、負の渦に激突した。その瞬間、あたりは頭が痛くなるほどの強い閃光と鼓膜が破れそうなほどの爆音に包まれ、私はそのまま倒れ込んだ。

夢

目を開けると、私は林の中でボールを片手に横たわっていた。頭がズキズキする。遠くの方から、聞き覚えのある声が私を呼ぶ。

「アリー！ボール見つかった？早くしてよねー！」

そうだ、私はボールを探しにきていたのだ。でも、今まで横たわってなにをしていたのだろう、思い出せない。私は急いで立ち上がり、ミサの声のする方へと走っていった。林を抜けると、そこにはおじさんと、ミサが立っていた。

「もう、遅いわよアリー。いつまで待たせるの？」

私はミサを見た瞬間、突然涙がこぼれてきた。

「ちょっと、アリーどうしたの？何かあった？」

ううん、と首を横に振りながら私はボールを片手に、急いでミサのところへ走って行ってミサに抱きついた。

「ミサ、大好きよ」

「何よ急に、おばけにでもあったのかしら？」

すると背後でおじさんの声が聞こえた。

「仲がいいこった。よし、日もくれてきたし今日は帰るとするか」

私は最後にもう一度ミサをギュッとを抱きしめてから、ゆっくりと離れた。

「うん、帰りましょう」

そう言って、私たちは車の方へと歩いていった。けど途中で、後ろの林から聞こえた気がして一瞬振り返った、だが構わずそのまま車に向かうことにした。

ポチャンッ

完